菩薩も毎日の隙ゆゑ、遷佛圖ふりてあそび居給ふ云々、是等の書にいふところをもつて、むかしはかの雙六の流行しをおもふべし、○略中さて此雙六は南無分身諸佛の六字を、四角あるひは六方の木に書て目安とし、南閻浮州よりふり出し、あしき目をふれば地獄へ墮、よき目をふれば天上に登り、初地より十地等覺妙覺等を經て佛に止るを上りとするの遊戯なり、○略中万治寛文の書籍目錄掛物の部に、淨土雙六と載たるは是なり、寛永正保の頃梓刻せしものなるべし、又延寶天和の書目錄に、淨土雙六、同中、同小とあるは、この雙六いよ〳〵流行て、あるひは抄略し、或は縮圖したるを彫せしなるべし、又貞享元祿の書目錄に、淨土雙六、同懷中、道中雙六、野良雙六とならべ出せり、懷中といふは、前の小とあるに同物なるべし、○略中

淨土雙六の牌匣○略圖　或人淨土雙六の札筥いふ物を藏す、牌は紫檀にてつくり、花鳥を蒔繪したるものなりしが、小兒の玩弄にうせたりとぞ、此札をおのれ〳〵が目印として、かの雙六をうち廻りしものなるべし、匣の大サ竪四寸九分、横三寸六分、深サ壹寸五分あり、

〔還魂紙料上〕淨土雙六附冶良雙六、冶良紋楊枝、道中雙六、

元祿十三年、役者評判記談合衝の序に、春雨ゑめやかにふり、子供相手に道中雙六、まければ天目に水一盃づゝのかけ六云々、これよりふるく道中すご六のことをいまだ見いでず、○略中道中雙六は貞享の比つくり出し、寶永正德の比より專流行しものなるべし、

〔嬉遊笑覽四雜伎〕道中雙六に類して、さま〳〵作り出たるものあり、今も春毎に新板出づ、

〔春雨樓詩鈔九補遺〕江門節物詩

道中雙六

兒女新年戯玩之名、圖自江戸至京師路上驛站、以爲局戯、各署名於小牌子、又記骰子、以數目投之、依其數歷站送牌子、因以至京前後、爲輸贏者也、首春同寶船圖叫賣街頭、